



# 英語教育実践の省察と新たな実践へ : マイ・イングリッシュ育成の新たな基盤作り

増見, 敦

北代, 尚之

大八木 優子

---

**(Citation)**

研究紀要 : 神戸大学附属中等 論集, 5:31-36

**(Issue Date)**

2021-03-31

**(Resource Type)**

departmental bulletin paper

**(Version)**

Version of Record

**(JaLCDOI)**

<https://doi.org/10.24546/81012681>

**(URL)**

<https://hdl.handle.net/20.500.14094/81012681>



実践報告

## 英語教育実践の省察と新たな実践へ —マイ・イングリッシュ育成の新たな基盤作り—

From Reflection to Action:

Our English Teaching Practice to Enhance Student's 'My English'

増見 敦 北代 尚之 大八木 優子

MASUMI Atsushi, KITASHIRO Naoyuki & OYAGI Yuko

本校英語科では、神戸大学附属中等教育学校(2020)にてマイ・イングリッシュの定義そしてその評価に係る議論を行った。本稿ではこれらの議論を踏まえた今年度の取組(1. 昨年度末に実施された Annual Reviewでの議論, 2. 神戸大学附属中等教育学校英語評価尺度“Kobe University Secondary School Framework (KUSF)”の改訂, 3. 前期課程(中学段階)を含めた語彙サイズテストの実施, 4. 探究的な学びを支える帯活動の検討, 5. 6年生を核にした全学年でのマイ・イングリッシュ育成の取組)及び今後の展望について報告する。

キーワード: マイ・イングリッシュ, 英語科, 協働的省察, 授業実践

Key words: My English, English Department, Collaborative Reflection, Teaching Practice

### I Annual Review での議論

2020年3月末に、英語科全員及び本校英語教育アドバイザーの大学教員が集い、一年間の本校英語教育実践に係る省察を行った。「本校英語教育の今までのやり方の解体、そしてその次へ」を主要テーマに掲げ、新指導要領実施を迎える節目として、今までの英語科実践の再検討を試みたものである。

はじめに、実用性と教養の点から全般的な英語教育の目的を概観した後、国際語としての英語の観点から英語を教える意義を確認しつつ、本校英語科が目指すマイ・イングリッシュの姿について議論を行った。そして各学年の本校在籍生徒の英語学習に対する学習観を俯瞰した後、各教員の授業実践と課題について共有し、次の実践課題の発掘を教員個人そして英語科全体の視点から試みた。附属小学校在籍児童の語彙サイズの実際も紹介され、小学校での「教科英語」の学習を経て、今後本校に入学する生徒達への指導のあり方についても議論がなされた。今後試みてみたい実践の具体

例として「附属コンテスト」, 「学年をすべて解体した習熟度別授業」等の案が登場するなど、会全体を通して幅広い内容の議論を行うことができ、次年度(2021年度)に向けた課題を確認することができたことは大きな成果であった。

### II 本校英語評価尺度 “Kobe University Secondary School Framework (KUSF)” の改訂

本校英語科では2012年にKUSF初版の発行を迎えて以来、現在KUSF第4版が運用されている(第3版発行に至るまでの検証及び改訂作業の具体的内容については増見(2016)を参照)。ここでは本年度実施した第4版への改訂について報告する。

2017年4月にKUSF第3版の運用を開始し、その後3年間に渡る実践を行ってきた。この間、学習指導要領改訂の動きに伴い、英語科では評価の在り方と評価の実際、またその課題について議論を深めてきた(神戸大学附属中等教育学校, 2020)。

一方、2020年3月には国立教育政策研究所から、新学習指導要領に対応した学習評価に関する資料

(「指導と評価の一体化」のための学習評価に関する参考資料)が公開され、小学校、中学校の各教科等における評価規準の作成や評価の実施等についての具体的な解説が紹介される等、新学習指導要領の全面実施を迎え、指導と評価に関する具体的な方向性が明らかにされた。

新学習指導要領の方向性を踏まえ、本校では今年度4月より教科全体を跨ぐ取組の柱として、それまでの教科等の教育目標(=観点別評価の枠組)としての基礎力・思考力・実践力の「3能力」及び「知識・理解」「スキル・運用能力」(基礎力)「論理的・批判的思考力等」「課題探究力」(思考力)「グローバルキャリア(市民的資質・能力)」(実践力)の「5要素」から「3能力・4要素」(基礎力:「知識・概念」「技能」、思考力:「論理的・批判的・創造的思考」、及び実践力:「自立・協同・創造の力」)の枠組で授業実践を行う方向性が確認された。これを受け英語科では、以下の点についてKUSF第3版の見直しを行うこととなった。

- ① 5要素から4要素の柱に修正するが、「課題探究力」の柱は当面残すこと。
- ② 観点別評価との関係性を示すこと。
- ③ 「論理的・批判的・創造的思考」の要素の中に「多元的思考」に関する記述を残すこと。
- ④ 各記述文に関しては現在までの実践の視点から慎重に吟味し、修正点があれば変更すること。

コロナ禍の中、4月よりリモート会議等で協議を重ね、2020年5月末にKUSF第4版が完成(神戸大学附属中等教育学校, 2021), その後、新型コロナウイルス感染症防止による学校の臨時休業が明けた2020年6月より運用を開始し、現在に至っている。

(報告者 増見 敦)

### III 前期課程(中学段階)を含めた語彙サイズテストの実施

すべての英語力の基本とされる語彙力(Nation, 1990)に着目し、本校英語科では後期課程(高校段

階)の発足以降、後期課程生徒を対象とした英語力の診断の1つとして、語彙知識の「広さ」(受容語彙)を測るサイズテストとして「望月テスト」(相澤他, 2010)を年1回実施してきた。教員にとっては、語彙サイズの経年変化を知ることで、学習指導要領で掲げられる習得目標値への達成度を知ることができるとともに、語彙指導の省察の機会にもなっている。また各生徒にとっても、フィードバックシートを得ることにより、今後の語彙学習を進めていく上でどの部分に重点的に取り組むべきかについて具体的に考えることのできるきっかけとなってきた(増見・石川, 2014)。

一方、前期課程を対象とした語彙サイズテストの実施については、検定教科書に出現する語彙に準拠した具体的なテストを本校が有していない等の理由で今まで見送られてきた。しかしながら新学習指導要領の実施を迎え、小学校では5,6年生で教科としての英語が開始されることを考えると、本校入学段階でのおおよその習得語数を予め調査しておくことは貴重な資料となり得る。加えて現在の前期課程各学年の習得語数を知ることで本校基礎期(中等1年, 2年)での英語指導のあり方の検討も可能となる。

こうした理由で、今年度は前期課程も含めた全学年を対象に語彙サイズテストを実施する運びとなった。実施にあたっては、今まで収集してきた後期課程のデータとの比較も目的の1つとするため、望月テストを一部使用することにした。

望月テストは1,000語レベルから7,000語レベルまで、全7レベルが設定されている。本調査では後期課程では全レベル、前期課程については中学校で学ぶ語彙数が1,200語(現学習指導要領)であることを踏まえ、1,000語レベルから3,000語レベルの3レベルを使用し、新型コロナウイルス感染症防止による学校の臨時休業が明けた2020年6月に全学年一斉に調査が実施された(6年生は11月にも実施)。以下、結果を示す(表1)。

表1 各学年語彙サイズテスト結果(2020年度)

| 学年・実施時期 | 平均(語数) | SD | n |
|---------|--------|----|---|
|---------|--------|----|---|

|          |         |        |     |
|----------|---------|--------|-----|
| 第1学年 6月  | 1,030.8 | 328.7  | 120 |
| 第2学年 6月  | 1,406.9 | 334.3  | 121 |
| 第3学年 6月  | 1,976.7 | 399.4  | 117 |
| 第4学年 6月  | 3,063.0 | 814.4  | 127 |
| 第5学年 6月  | 3,919.5 | 872.2  | 107 |
| 第6学年 6月  | 4,923.1 | 1032.8 | 132 |
| 第6学年 11月 | 5,022.7 | 805.2  | 127 |

結果、1) 学年が上がるごとに安定した伸び、特に3年以降1年間で900~1,000語以上の伸びが見られ(ただし6年当初で伸び止まりの傾向が見られる)、八島(2002)の示す値(高校段階で毎年平均500語程度の伸び)を大幅に上回ること、2) 入学直後の段階で新学習指導要領の示す習得目標値(小学校600~700語)を上回る数値(約1,031語)を得たこと、3) 中学段階3年終了時点(第4学年6月)で新学習指導要領の示す値(中学校1,600~1,800語)をはるかに上回る数値(約3,063語)を得たこと、そして4) 高校卒業に近い段階(第6学年11月)では新学習指導要領で掲げられる値(小中高新出4,000~5,000語)を満たす結果(約5,023語)を得たこと、等が明らかとなった。

生徒のマイ・イングリッシュ育成に向けた授業改善の資料の1つとして、今後も定期的な調査を積み重ねてゆきたい。

(報告者 増見 敦)

#### IV 探究的な学びを支える帯活動の検討

探究の力を高め、かつマイ・イングリッシュの育成を具現化させるために、前述のように英語科ではAnnual Review, 教科打ち合わせなどを通して議論を継続的に行ってきた。

まず、その中でフォーカスされたのは、ある特定の学習単元でそれを育もうとするのではなく、毎授業時間の一部を連続的にその実践として使う、いわゆる帯活動を、探究力育成の場とすることが最も効果的ではないか、ということであった。帯活動については、繰り返し行われる言語材料との出会いこそが学習内容の定着をもたらす(本多, 2012)とされ、その有効性も示唆されている。また、

帯活動の研究は、実践発表予定者であった教員の、「既存の warm-up と本展開との間に乖離があり、うまく機能していない」という指摘に依るところも大きく、その解決策としての意味合いもあった。

次に問題になったのが、ではその帯活動を通じて本校の目指す探究の5つの力(見つける力・調べる力・まとめる力・発表する力・考える力)の育成は可能か、という問いである。実際の議論では、これらの5つの力を育成しようとするときに、授業デザインのし易さの違いがあるか、といった部分にまで言及された。そこで共通の認識として出たのが、特に帯活動で「見つける」、「調べる」を育む実践が難しいのではないかということであった。

このような議論を経て、教員が今までの実践の中から帯活動のアイデアとして生かせそうな実践略案(探究の力を高める帯活動例)を、1) 探究の5つの力の中で活動の中心となる力、2) 3能力(基礎力、思考力、実践力)の評価観点、の2点に言及しながら各自が作成し、提案を行った。以下はその具体の一部を示したものである(表2)。

表2 帯活動の流れの具体例(一部抜粋)

| 育む力   | 学年 | 展開  |
|-------|----|---|
| 見つける力 | 3年 | ①各自の悩み・心配事を<br>英文でシートに記入<br>②教室をA,Bの2つに分割、回収<br>③A, B入れ替えて配布<br>④各自相談の解決法を書いて記入者へ返却 |
|       | 4年 |   |
| 見つける力 | 4年 | ①テーマについて小グループで多くの質問を考える   |
|       |    | ②開いた問いと閉じた問いに分類する   |
| 調べる力  | 4年 | ③問いの長所と短所について小グループで話合う  |
|       |    | ④開いた問い・閉じた問いの書き換えを行う  |

|  |    |                                |
|--|----|--------------------------------|
|  | 5年 | たてる<br>②英文資料を要約<br>③資料をグループで紹介 |
|--|----|--------------------------------|

これらを参考に研究授業予定者は帯活動の充実に努めていき、教員同士でも授業見学を通して意見交換を行った。英語科では今後も同様の活動を通して実践の改良に努めていきたいと考えている。  
(報告者 北代尚之)

### V 6年生を核にした全学年でのマイ・イングリッシュ育成の取組

コミュニケーション英語Ⅲの授業において、6年生(7回生)生徒へ最後に提示した課題は「卒業スピーチ」であった。この7回生という学年は、様々な変革の波を受けてきた。まず授業においては、それまで少人数編成による習熟度別授業が実施されていたが、この学年からホームルーム単位でコミュニケーション英語を実施することとなった。授業内での発表の機会が物理的に減少する中で、双方向のコミュニケーションをいかに可能とできるか、その授業形態を模索した学年である。また本校で、初めて一般適性検査を実施した学年でもある。これまで附属小学校からの生徒を全面的に受け入れていたが、7回生からは一般適性検査により入学した生徒と附属小学校出身の生徒が混在する状態となった。新たな人間関係の構築や学力差の軽減など、これまでとは異なる課題が見出された学年でもある。その上、大学入試制度も大きく変化した。英語外部試験の導入は見送られたものの、大学入学共通テストの実施により英語の出題傾向も大きく変化した。

このような学習環境の変化に対応しながら学びを続けた7回生の生徒に対して、最後のスピーチはテーマを定めることをしなかった。自由に思いの丈を自分の言葉に乗せて発することを求めた。ただし唯一の条件として、スピーチを行う対象を後輩とした。

この卒業スピーチには主に2つのねらいがあった。一つ目は、6年生がこれまでの学業の成果を発

表する場となることであり、もう一つは彼らの「マイ・イングリッシュ」を全学年で共有することであった。

授業において、音読をはじめとするアウトプット活動を取り入れてきたものの、後輩に対してスピーチを実施するという課題は、生徒にとっても初めての試みであった。日頃より慣れ親しんだ友人へのメッセージではなく、後輩に向けたスピーチを準備してもらうという部分にも意図があった。そのスピーチが自分よがりになることなく、深く創造性を働かせた上でオーディエンスへの迫り方を工夫してもらいたかったためである。ただの記号化された英語では勿論思いは伝わらない。6年間という中等生活を振り返り、そこから湧き上がる思いを英語という言葉に乗せて後輩へ届けるためには、自らの英語で後輩へ語りかける必要がある。言葉としての英語で、後輩の目線に立ち、どんな内容をどのように後輩に伝えるべきかを考えることは、自らの「マイ・イングリッシュ」をいかに活用し発表するかにつながる考えたためである。

以下に示す図1では、低学年である2年生を対象としたスピーチの場であるが、6年生が事前に語句の理解をサポートした上でスピーチ発表が実施された。図2は4年生を対象としたスピーチで、英語でのやりとりを組み込みオーディエンスの興味を引こうとしている様子が伺える。



図1 2年生へのスピーチ



図2 4年生へのスピーチ

次に、このような機会を設けたもう一つのねらいは、後輩への影響である。本校で英語を学ぶ全ての生徒に「マイ・イングリッシュ」の形を見て、耳で聞いて、体験してもらいたいというねらいがあった。1年生であれば5年後の自分自身を想像する機会となり、5年生であれば残り1年となった本校での英語学習において何を心得るべきかを再認識する場になる。卒業を目前とした先輩の姿を目にすることで、本校で育成するマイ・イングリッシュの形を知ることは、今後の学習指標の一つになりうると考えたからである。以下に後輩がスピーチを聞いた後で先輩に送った感想の一部を紹介するが、その中には彼らなりにスピーチの良さを評価する言葉が出てくる。何が良くて見本となるべき形なのかを、このような形式で学ぶことの重要性に気づかされる一幕であった。それに加えて、高学年になるにつれて発表の形式よりもスピーチの内容に視点が移り、共感、賛同、批判などのコメントが見られた点も興味深かった。

- 【1年生】初めて先輩のスピーチを聞いた。英語の発音が良すぎてよくわからなかった。イヤ、もう無理よ!!!格の違いを見せつけられた。
- 【2年生】一つ一つの単語が簡単に隅にでてくる難しい単語もホワイトボードに書いてあるのでほとんど理解できた。3つの理由に分けて説明してくれた。
- 【3年生】やはり夢は大切だと再確認した。夢があれば目標ができるし、やるべきことも見つけられるから探そうと思った。
- 【4年生】この1年間 covid-19 のせいでいろいろなイベントがなくなってしまったものの、特別でない毎日を大切にすることが大事なのだと思う。
- 【5年生】I worked with her as a *togensai* committee member. I respect her because she tried to make a new successful plan. I want to join GAP

more and make a connection with international friends like her.

このように実施してきた卒業スピーチを終えて、6年生の生徒はこの課題をどのように認識したのか大変気になるところであった。11月から12月となれば受験勉強に必死で、後輩相手にスピーチなどやってられないと思う生徒も少なからずいたのであろう。実際、振り返りの記述アンケートには「実施時期をもう少し早めてもらいたい」という記述回答が複数あった。しかし、その一方で卒業スピーチという課題を肯定的にとらえる回答が多かったことも事実である。以下、テキスト処理の結果(表3)にも見られるように「自分自身の中等生活を振り返る良い機会となった」という回答が目立った。

表3 6学年の様子(頻度上位語)

|   | 名詞 | サ変       | 動詞                | 形容詞              |
|---|----|----------|-------------------|------------------|
| 1 | 自分 | スピーチ     | 思う                | 良い               |
| 2 | 機会 | 生活       | 話す                | 早い<br>多い         |
| 3 | 英語 | 練習       | 振り返る              | 少ない              |
| 4 | 後輩 | 準備       | 伝える               | 悪い<br>楽しい<br>上手い |
| 5 | 学校 | 成長<br>発表 | 感じる<br>考える<br>思える | 嬉しい<br>強い<br>高い  |

名詞において最頻出語となった「自分」という語を確認してみると、上記回答の他に「少ない準備時間であってもそれなりに発表できた自分に大きな成長を感じることができた」「自分の学校生活は本当に充実したもので、嫌なことや壁を頑張って乗り越えられて良かったと思った」「自分だけでなく友達の成長も強く実感できた」とスピーチを通じて、自己との対話や他者との対話があったことを示している。

以上のように6年生の卒業スピーチはマイ・イングリッシュを活用し、自己そして他者との対話を深める機会となった。本校英語科の目指すマイ・イングリッシュの構築は、英語という言葉

用いた他者理解と同時に他者に自分自身を理解してもらおうことを目指している。7回生には135名の生徒が在籍しているが、個々の生徒が習得した英語技能はさまざまである。しかし、その技能がどの段階であっても、それぞれの生徒が自分の「マイ・イングリッシュ」を駆使し、試行錯誤しながらも自分の考えを表現し、そして様々な人とつながっていくことを今回の卒業スピーチを通じて体験することができたのではないかと考える。

(報告者 大八木 優子)

## VI 今後の展望

以上のようにコロナ禍の影響を受けつつも、英語科全体による生徒のマイ・イングリッシュ育成に向けた着実な基盤作り、そして卒業を間近に迎えた生徒達が、本校での英語学習の集大成として本校での学びについて自身の英語を用いて同輩及び後輩達に披露できる場の設定、等の取組を行い一定の成果を収めることができた。

一方、未だ検討すべき課題も多く残されており、現在検討を開始したばかりのものもある(中高を一貫した言語材料の指導のありかた、等)。今後もマイ・イングリッシュ育成に向けた授業改善の方途について検討を重ねてゆきたい。

## 参考文献

- 相澤一美・望月正道(編著)(2010)『英語語彙指導の実践アイデア集—活動例からテスト作成まで』 東京:大修館書店.
- 神戸大学附属中等教育学校(2020).「英語科の教育目標と実践発表」『研究紀要神戸大学附属中等論集(別冊)』,4,153-165.
- 神戸大学附属中等教育学校(2021)『神戸大学附属中等教育学校英語科10年記念誌—中等教育学校発足後の歩み—』.神戸大学附属中等教育学校英語科
- 本多敏幸(2012)「長いスパンで帯活動をプランニングする」『英語教育』5月号,13-15. 東京:大修館書店.
- 増見敦・石川慎一郎(2014)「高校生の英語力を推定する語彙テストの検討—サイズテストと速度テストの比較—」『神戸大学国際コミュニケーションセンター論集』,11,14-30
- 増見敦(2016)「神戸大学附属中等教育学校英語評価尺度の開発と今後の展望—妥当性の検証を踏まえて—」『研究紀要 神戸大学附属中等論集』,1,57-70
- 八島等(2002)「日本人高校生の語彙サイズ」.『関東甲信越英語教育学会研究紀要』,6,29-42
- Nation, I. S. P. (1990). *Teaching and learning vocabulary*. New York: Heinle and Heinle.